

竹中半兵衛さんあれこれ



1 竹中半兵衛重治公の生誕から結婚まで

(1) 生誕地

天文 13 年(1544 年)美濃国大御堂で生まれた。

父は、竹中重元(しげもと)。

母は、杉山久左衛門の娘で、法名が「妙海大姉」である。[美濃国諸家系譜]

(2) 父重元(しげもと)が岩手弾正を攻める。

永禄元年(1558 年)竹中重元は、岩手弾正を攻めて追い出し、岩手に移り住み、岩手4郡のほか福田、長松、栗原付近一帯の六千貫の領主となった。

(3) 重治の少年期

重治は通称半兵衛といい、また、重虎とも称した。幼時は、弱々しい腺病質的な子であったが、読書を盛んにし、学を好み兵書の研究に励んだ。

(4) 菩提山の砦を整備

父重元は、菩提山の岩手城奪取の翌永禄2年(1559 年)に、その砦を再構築

(5) 父重元の死

永禄5年(1562 年)2月7日、病により岩手にて没す。

父重元の死により家督を継ぐ。半兵衛 19 歳。

(6) 重治の結婚

重治は、永禄5年(1562 年)父の没後、斎藤龍興に属し、西美濃三人衆(安藤守就・稲葉一鉄・氏家ト全)の一人、安藤守就女「阿古姫(とく)」と結婚、常時、稲葉山城下に住んでいた。

2 半兵衛さんのよもやま話

(1) 半兵衛さんの性格を表現する慣用句として「知らぬ顔の半兵衛」が有名である。

真相を見抜きながら知らない振りをして、物事に取り合わない様子をいう。

(2) 竹中家の家紋は九枚笹であるが他にも餅紋があり、面白い逸話がある。

元亀元年(1570 年)、ちょうど鏡開きをしようとしていたとき、姉川の戦に出ることになった半兵衛さんは、その餅を懐に入れ腹が空いていたら食べようと思っていた。合戦最中、飛んできた矢が半兵衛さんに当たったが、傷を負うことがなかった。なんと、懐の餅に矢が刺さっていたのである。

それ以来、餅に命を救われた半兵衛さんは、石餅(いしもち)紋を陣羽織に付けて合戦に臨むようになったといわれている。

(3) 軍談中の席立ちの戒め

七歳の息子 重門に「軍談中に小用に立ってはならぬ。竹中の子が軍談に聞き入って座敷を汚したといわれれば、竹中家の面目であろう。」

3 竹中半兵衛の軍師としての活躍



- (1) 永禄4年(1561年)、斎藤龍興に仕えていたときに織田信長に攻められるが、十面埋伏陣(じゅうめんまいふくじん)と呼ばれる独特の伏兵戦術で織田勢を破ったとされる。
- (2) 永禄6年(1563年)、新加納で織田勢を打ち破っている。(斎藤家の家臣のとき)
- (3) 永禄7年(1564年)2月、斎藤龍興の居城・稲葉山城(後の岐阜城)を主従18人で奪った。
- (4) 永禄7年(1564年)8月には自ら稲葉山城を龍興に返した。
その後は斎藤家を去り、北近江の戦国大名・浅井長政の客分として、東浅井郡草野に3千貫の禄を賜るが、約1年で禄を辞して旧領岩手へと帰り、栗原山へ隠棲した。
秀吉の三顧の礼がここであったといわれている。
- (5) 元亀元年(1570年)、朝倉討伐中に浅井が寝返った際、浅井軍に追われるが、秀吉の軍師として半兵衛は殿(しんがり)軍を任され無事に脱出している。
- (6) 元亀元年(1570年)、鎌刃城主堀二郎の家臣樋口三郎兵衛が、長亭軒城(松尾山城)を固め、織田信長の西上を阻止しようとするのを、信長は秀吉に命じて半兵衛をして樋口三郎兵衛を降伏させようとした。
半兵衛は樋口三郎兵衛とは旧知の間柄であったので、長亭軒城に赴き説得したため、堀二郎と共に樋口三郎兵衛は降伏した。
半兵衛はこの手柄により信長から守光の太刀、国光の短刀、甲冑、黄金50枚を与えられる。
- (7) 天正元年(1573年)、小谷城の戦いで浅井一族は滅びたが、浅井長政の正室お市の方(信長の妹)とその子供浅井三姉妹を救出している。
このとき、鉄砲は使用せず、本丸の浅井長政とその父親浅井久政を分断するため、中間にある京極丸を真っ先に攻め落とし、長政の良識によりお市親子を救出した作戦は、半兵衛の立案によるものといわれている。
- (8) 長篠の戦いでの陽動作戦を見破る
天正3年(1575年)5月、長篠の戦いにおいて武田勢の一部が向かって左側に移動した。秀吉は、回り込まれると思い移動したが、半兵衛は、織田勢の陣に穴を開ける陽動作戦と察し、手勢と共に持ち場を離れなかった。まもなく武田勢は元の位置に戻ったが、半兵衛がいたので事なきを得た。
- (9) 天正5年(1577年)、黒田官兵衛と共に現在の兵庫県佐用郡の福原城、上月城を攻め落城させている。
- (10) 天正6年(1578年)、現在の岡山県の備前八幡山城を調略によって落城させている。(宇喜多の支城で、半兵衛にとっては一番西の遠征地である。)
- (11) 天正7年(1579年)、現在の兵庫県の三木城を兵糧攻め(三木の干ごろし)による無血開城戦法を献策しているとき、36歳の若さでこの世を去った。

4 黒田家とのつながり（二兵衛後の竹中家と黒田家）



- (1) 三木城攻略中に、突如、荒木村重が毛利方へ寝返ったために、官兵衛は村重に翻意を促すため有岡城へ出向いたがなかなか帰ってこない官兵衛を、信長は裏切ったと判断し、官兵衛の子松寿丸を殺すように秀吉に命じたが、半兵衛は岩手の地に匿った。
（今の五明稲荷付近といわれている）
半兵衛が松寿丸を岩手の地に匿ったにより、黒田家の血筋は繋がった。
この時、半兵衛の子供、吉助（重門）と松寿丸（長政）は共に遊んでいた。
後の関ヶ原合戦では、長政は重門勢を守るように布陣している。
松寿丸が岩手の地を去るとき植えたと言われる銀杏の木が五明稲荷にある。
- (2) 官兵衛は、半兵衛を慕って半兵衛の戒名「深龍水徹」の「水」を「如水」として使ったのではないかとされている。
- (3) 黒田家の家紋「藤巴」に、竹中家の家紋「九枚笹」から三枚を貰っている。
- (4) 半兵衛は、天正7年(1579年)6月13日に播磨三木城外の陣中(兵庫県三木市)で病没するが、黒田官兵衛の子孫である筑前福岡藩主・黒田家(福岡市)と半兵衛の子孫である旗本・竹中家の交流は続く。
慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いの直前まで、竹中重門は豊臣方に属していたが、黒田長政の勧誘を受けて徳川方に転じた。
関ヶ原での決戦では付近の領主である重門の道案内のもと、長政は間道を迂回して豊臣方の側面へ回り込み、石田三成の隊を銃撃して大打撃を与えている。
戦勝後、長政のとりなしもあったからか、決戦直前までの重門の行動は不問に付され、竹中家は5千石の徳川將軍直参旗本となることができた。
- (5) 長政は半兵衛から受けた恩義に報いようと、竹中重次（重門の次男）をもらい受けて手許で育て、のちに福岡藩士に登用した。
- (6) 竹中家の菩提寺・禅幢寺には官兵衛と長政の二人の戒名が並んだ位牌が安置されている。
- (7) 長政と福島正則との関係がこじれたときは、府内藩主・竹中重利（半兵衛の従兄弟、妹婿、重義の父）が割って入り和解させている。
この後、和解の証として福島正則から黒田長政に贈られたのが、かつては半兵衛所用の「銀箔押一ノ谷形兜」であった。
現在、この兜は福島正則が母里友信（太兵衛）に与えた名槍「日本号」などとともに、福岡市博物館の所蔵となっている。
- (8) 寛永9年(1632年)に藩主黒田忠之と重臣栗山大膳（黒田官兵衛の第一の忠臣栗山利安の嫡子）とが対立した際（黒田騒動）、大膳を保護したのは長崎奉行であった竹中重義である。
ちまたでは、大膳を忠臣とする説が根強いが、水面下での重義の奔走が、黒田忠之を除封（じょほう）の危機から救った可能性も否定できない。